

成果報告書

記入日 2023年 2月 21日

フリガナ：(タチカワ マリエ) 氏名：立川 真理恵	渡航先国名 大韓民国	留学先の所属機関：延世大学校 帰国後の所属機関：東京大学
研究テーマ：現代朝鮮語における〈液体〉関連多義語の意味分析		
研究期間：2022年 2月～2023年 1月(1年 0ヶ月)		
研究成果(概要) 研究期間中は、朝鮮語学習者向けキーワード別表現辞典の作成を視野に入れて、派遣先の大学院演習授業を活用して様々なコーパス調査を実施した。特に、本研究では〈液体〉というカテゴリーに着目し、〈液体〉の様態を表す朝鮮語の用言をコーパスで収集し、文体・ジャンルごとの意味分布を調査した。		
研究成果(詳細) (1)研究の動機と背景 本テーマは、「朝鮮語学習者の長期記憶に定着しやすい辞書記述の方法を模索すること」「キーワード別の朝鮮語表現辞典を制作すること」という二つの最終目標に基づいたものである。一般に、森羅万象を表す多義語は、各々の中心義を起点として実に様々な意味へと派生していきることが多い(「心が晴れる」「心に雨が降る」「氷のような視線」「時間が流れる」「悲しみに浸る」など)。例えば、植物の部位を表す語の場合、「争いの種」(物事の原因)、「根はやさしい」(生来の性質)、「今はまだ蕾だ」(成熟前の不完全な状態)、「才能が花開く」(物事の達成・成功)、「努力が実を結ぶ」(物事の成就)のように、「種」「根」「蕾」「花」「実」という植物部位の名詞の拡張義に、「植物の生長過程に対する人間の認識方法」が反映されている。母語話者の場合、日常生活ではこのような表現はあまりにも陳腐でありふれているため、背後に存在する概念的な関係性を意識することはほとんどない。しかし、外国語学習者の場合、このような視点は多義語の意味を長期記憶に定着させる上で効果的であると考えられる。 一般的に、語彙は何らかの連関性を持つ語彙同士の集合として記憶されることが知られている。特に意味的関連性を持った語彙群(例：身体語彙・季節関連語彙)、共通の接辞や語幹を持つ複合語の語彙群(例：헛소리, 헛소리, 헛기침)、特定の単語と共に用いられる語彙群(例：[객기/농간/응석/허세/뽕세/행패]을/를 부리다)、連想関係に基づいた語彙群(例：생일-> 케이크, 선물, 미역국, 파티, 촛불, 축하, 친구...)を中心とした語彙教育は、学習効率を高めると同時に対象地域の文化を学ぶ上でも非常に有用な教授方法であると言われている(강현화, 2021:92-93)。このような観点から、同一または類似のカテゴリーに属する語との関連性に着目した辞書編纂を視野に入れて、留学期間中は〈液体〉というカテゴリーに着目し、様々な〈液体〉の様態を表す多義語を対象として意味分析を行うことにした。		
(2)留学中の取り組み(一)―大学院授業におけるコーパス実習 留学期間中はコーパス演習授業(国語国文学科開講)を受講し、延世大学校で構築された均衡コーパスの基本的な使用方法と研究の方法論を体系的に学んだ。延世大学校はコーパス研究及び朝鮮語教育関連研究が非常に進んでおり、大学院授業を通して様々な知見を得ることが出来た。		

①使用コーパスについて

本演習では、延世大学の서상규先生が構築された言語コーパス「새연세말뭉치4」(nYsc4_문국어 장르 비교 균형 말뭉치)を使用し、用例収集にはヴァンダービルト大学の장석배先生が開発された検索システム「말씀2019」を用いた。これらは一般への無断配布が禁じられており、서상규先生の授業の履修者や共同研究者に限って先生を通して入手することができる。受給者は授業履修者として配布して頂いた。

本コーパスは、書き言葉(「学術教養」「新聞」「小説」「雑誌」「準口語」と話し言葉(私的対話・私的独白・公的対話・公的独白・国会議事録)のテキストデータで構成されている。書き言葉・話し言葉に含まれるすべてのジャンルにおける総語節(分節)数がそれぞれ 15 万語節に揃えられており、品詞情報や形態素情報の他に『延世韓国語辞典』(以下『延世』)の見出し語に基づいて同音異義語番号が付与されている。

② 実習の成果

a. コーパスデータをマクロ的に見た場合：コーパスデータには莫大な単語が含まれているが、実際には非常に限られた範囲の単語や文法が繰り返し使用される。서상규(2017)は、先行研究の重要語彙目録を基に朝鮮語の基本語彙を制定し、これらの語が「韓国語教育標準語コーパス」を占める割合を調査した。その結果、基本語彙の単語数(異なり語数)がコーパス全体の単語数の 6%に満たないのに対し、基本語彙の頻度数を合計した延べ語数はコーパス全体の 8 割程度に該当するということが明らかになった。この結果は、実際の言語使用が少数の高頻度語と多数の低頻度語によって成り立っているという事実の裏付けになる。

b. コーパスデータをミクロ的に見た場合：単語自体が複数の意味を持っていても、実際には少数の限られた用法・共起関係が反復して使用されることが多い。例えば、『延世』では形容詞「밝다」(明るい)に 13 個の意味が記述されているが、서상규(2014)では 13 個のうち 2 つは頻度 0 と記録されており、残り 11 個の意味のうち「声や表情の明瞭さ」「灯りの明度」「室内の明度」という 3 つの用法が全体の約 7 割を占めている。更に、実習の一環として「새연세말뭉치 4」を用いて上記と同様の調査を行ったところ、概ね서상규(2014)と類似の意味頻度が得られた。

c. 「中心義」という概念に対する再検討：多義語の場合、第一義に設定される意味は多くの辞書で概ね一致するが、辞書上の中心義が必ずしも実生活における高頻度意味と一致するとは限らない。例えば、「눈부시다(眩しい)」の中心義を直観的に考えると〈目で直視できないほどに光が明るい様子〉のように設定できそうだが、서상규(2014)及び授業内での実習結果によって、実際の言語使用では〈見惚れるほどに色や光が美しい様子〉〈活動や業績が素晴らしい様子〉という拡張義の方が高い頻度で現れることが明らかになった。この結果は、人間が直観的に想起する認知上の中心義が頻度上の中心義と必ずしも一致しないという事実を客観的・計量的に裏付けている。

d. 文体・ジャンルごとの意味分布：語の意味分布の内訳を詳しく見ると、ある意味が特定の文体・ジャンルで集中的に出現することが少なくない。そのため、語の使用状況を詳しく把握するには、「새연세말뭉치 4」のように様々な文体・ジャンルの言語資料を集めた均衡コーパスを用いて意味分布を詳細に確認する必要がある。従って、〈液体〉多義語の意味分析の際には文体別・ジャンル別の意味分布も合わせて調査することにした。

(3)留学中の取り組み(一)〈液体〉関連語彙の収集と意味分布調査

①調査手順：本テーマでは、コーパス実習で習得した内容に基づいて以下のような手順で調査を行った。

a. 〈液体〉の様態別に調査語彙を決定：〈液体〉の様態分類については大石(2006)等の先行研究を参考した。調査対象語彙の一例は以下の通り。

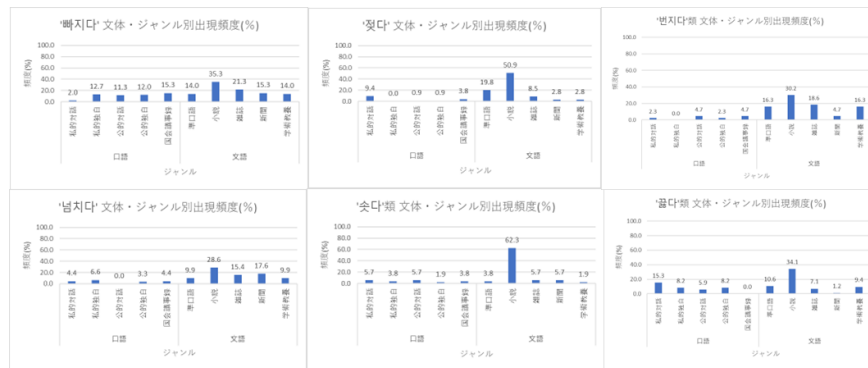
流れる：흐르다, 흘러가다, 흘러나오다, 흘러다など/湧き上がる：솟다, 솟아오르다, 끓다, 끓어오르다, 넘치다など/包囲する：싸지다, 짓다, 적시다など/降り注ぐ：쏟다, 쏟아지다, 붓다など/にじむ・しみる：스미다, 새다, 어리다, 번지다など

b. コーパス調査：上記の語について、「새연세말뭉치 4」及び「말씀 2017」を用いて文体別・ジャンル別の語彙分布及び意味分布を調査した。

c. データに基づいた考察：調査結果を基に、各語の中心義と派生義の意味関係を検討するとともに、様態ごとの意味特徴及び〈液体〉関連語彙全体の意味特徴を考察した。

②分析結果

a. 語彙分布・意味分布：まず、文体・ジャンル別分布については、いずれの語も文語資料での使用が主であり、特に小説作品において高い頻度で現れた点が特徴的だった。意味分布についても、各々の多義語の意味がより多様に出現したのは主に文語資料であり、口語資料に現れる意味は極めて限定的であった(右図は調査結果の一例)。また、中心義と派生義の出現頻度については、第一義(〈液体〉の意味)の用法が高い頻度で現れる語が多く見られたが、出現用例数の大半を派生義の用法が占める語も少なくなかった(例：右図‘젖다’と‘빠지다’の意味分布)。



b. 意味特徴：〈液体〉関連語彙の意味特徴を概観すると、各々の〈液体〉の様態を起点として様々な意味に派生しており、特に全体的に〈音〉〈香り〉〈表情〉〈言葉〉〈感情〉といった抽象的な現象の変化や様子を表す意味に転用される傾向が見られた。右の表は〈液体〉の様態ごとの意味特徴を簡単に整理したもの。

液体の動き	意味特徴総括	共起例
降り注ぐ	資金や群衆の動き・流通等を表す意味に転用される。感情やエネルギーをある対象に集中して投入するさまを表す意味にも転用される → 〈落下物〉：液体→資金・群衆・感情・エネルギーなどと(受け手)の関係性	직금을 붓다(種立金を注ぎ込む), 람을 붓다(力を注ぐ), 비난이 쏟아지다(非難が降りかかる), 정성을 쏟다(真心を注ぐ)
湧き上がる	感情や気配の激しい変化・あるものが基準を超えて多岐にわたるさまを表す意味に転用される。容器の中から外に溢れ出す際に発生する力動的(勢い)が動的な感情と意味的に結びつき、容器の限界点を越えて溢れ出す様子は基準値を超えて多いものとリンクする。「끓다(沸く; 沸騰する)の場合、中心義が持つ(熱)のイメージが派生義に追加される。 → 〈容器〉と〈内容物〉：液体→感情などの関係性	호기심이 끓어오르다(好奇心が湧き上がる), 숨을 끓이다(心を焦がす), 박진감 넘치는 이야기(迫力溢れる物語), 연민의 정이 솟아오르다(憐れみの気持ちが湧き上がる)
包圍する	ネガティブな感情・状況に陥るさまを表す意味に転用されることが多い。水の中に一度落ち込むとなかなか抜け出せないという一般的知識が、好ましくない感情や状況への没入と意味的に結びつく。日本語の「溺れる」「沈む」等の意味拡張と類似している。 → 〈包圍物〉：液体→感情・状況などと〈対象物〉の関係性	위기에 빠지다(危機に陥る), 사랑에 빠지다(恋に落ちる), 숨에 젖다(悲しみに浸る), 타성에 젖다(情に陥る)
流れる	時間の経過・情報や噂の流出・音や光などの広がり・資金や群衆の移動・雰囲気や気配の継続など多様な意味に転用される。河川などが一方へ途切れなく移動していく様子がこれらに派生義と意味的に結びつく。自動詞호르다に比べると、他動詞흘리다は基本義の出現頻度が圧倒的に高い。一方, 흐르다는 흘리다に比べて派生義の種類が非常に多様である。また, 흘러가다, 흘러나오다のような複合語の場合、意味の転用に制限が見られる(例: 흘러나오다は中心義よりも(資金の移動) (情報の流出) (光・音・香りの出現・広がり) の用例の方が高い頻度で現れた)。 → 〈移動体〉：液体→時間・情報・音・気配などと(目的地)の関係性	시간이 흐르다(時間が流れる), 정보가 흐르다(情報が流れる), 음악이 흘러나오다(音楽が流れて来る), 흘러간 옛이야기(過去の話), 웃음을 흘리다(笑みを浮かべる)
にじむ・しみる	光や音の広がり・表情の広がり・感情や気配の出現・情報や噂の流出等を表す意味に転用されることが多い。液体があるものの表面で次第にゆつくりと専ら面積を広げていく様子(にじむ)、液体があるものの表面を通り抜けて次第にゆつくりと内部へ入り込んでいく様子(しみる)が、上記の派生義と意味的に結びつく。日本語の「にじむ」「しみる」等の意味拡張と重なる部分がある。なお, 변지다(にじむ・広がる)は(現象の深刻化) (問題の拡大)の意味にも転用される。 → 〈移動体〉：液体→光・音・表情・感情等と(目的地)の関係性	두려움이 배다(恐怖が滲む), 웃음이 새어나오다(笑みが漏れ出る), 분노가 어리다(怒りが浮かぶ), 소리가 변지다(音が滲む), 국제문제로 변지다(国際問題に発展する)

(4)今後の課題

本調査で明らかになった〈液体〉関連語彙の意味特徴は、キーワード別の表現辞典を編む際にも有用な情報になると考えられる。ただし、本調査で用いた「새연세말뭉치 4」は大規模コーパスではないため、より多様な用法・共起関係を収集するには、更に規模が大きいコーパスも併せて使用する必要がある。また、今回は調査対象を〈液体〉の様態を表す用言に絞ったが、今後は名詞や副詞へと対象を広げて調査を継続するとともに、〈液体〉以外のカテゴリーに属する語彙についても同様の調査を行う予定である。

【参考文献】

강현화(2021) 『한국어 어휘 교육론』 서울: 한글과컴퓨터/서상규(2014) 『한국어 기본어휘 의미빈도 사전』 한국문화사/서상규, 오오이 히데아키(2017) 『韓日對譯 韓國語 基本語彙 意味頻度 辭典』 한국문화사/大石(2006) 『『水のメタファー』再考—コーパスを用いた概念メタファー分析の試み—』 『日本認知言語学会論文集』第6巻, pp.277-287

留学中の生活・研究でのトピックス

(1) 韓国で出版された絵本の調査(絵本を基盤とした語学・文化教育のために)

元々「絵本と言語教育」というトピックに関心を持っており、留学中は韓国絵本の収集を並行して行った。その延長線上として、大学院の期末報告書のテーマを「読み物としての絵本の難易度判定」に定め、韓国絵本 10 作品における語彙分布と難易度を調査した。そして、各作品の語彙的特徴を探るとともに、朝鮮語教育への活用の可能性について検討した。調査の結果、全体的に初級語彙が占める割合が高いものの、作品別に概観すると難易度分布にばらつきが見られた。更に絵本という資料の特性上、絵から語の意味を類推できる場合もある。絵本の難易度判定基準を設けるには、今後このような問題を総合的に検討していく必要がある。今後は調査対象を広げて同様の調査を継続していくとともに、「語彙と絵との関係性」といった絵本特有の要素とも絡めて考察を深めていきたい。

(2) 日本で出版された朝鮮語教材における文法記述の問題点

大学院授業の期末報告書として、日本国内で出版された朝鮮語教材のうち国立大学で多く使用されている初級教材 5 冊を選定し、特定の文法事項がどのように記述されているかを調査した。その際、授業担当の先生から「もう少し分析を深めて内容を整理すれば短い論文形式で投稿できる」とアドバイスを頂いた。現時点ではまだ分析の途中段階だが、今後も更に考察を続けて内容を整理し、論文形式で投稿することを目指している。

(3) 派遣先の日本語勉強会における語学交換(日本語-朝鮮語)

大学の日本語同好会に所属し、メンバーの一人と語学交換という名目で定期的に交流した。交流を通して、両言語間のニュアンスの違いや翻訳の難しさ、母語の干渉による意思疎通の失敗など、机上の勉強だけでは気づきにくい内容を新たに知ることができた。最初のきっかけこそ「語学交換」だったが、一年経った現在では心から分かり合える尊い友人の一人となった。日韓関係が問題となる中、このような一般レベルでの異文化理解の重要性を痛感した。メディアの情報を鵜呑みにして主観的に他国を評価する段階を卒業して、現地の人との交流の中で多様な価値観を共有することこそ、真の異文化理解への第一歩であるということ学んだ。

(4) その他—コロナ禍における留学生活

受給者が渡韓した 2 月はコロナの状況が極めて深刻な時期であり、入国後の手続きが現在よりもかなり厳格だったため、開始早々あらゆる困難に直面した。受給者も入国後 10 日間の隔離期間が明けてすぐにコロナに罹患し、更に 10 日間の隔離を経験した。感染者の爆発的な拡大により十分な支援を受けることが難しく、情報の提供も足りなかったため本当に不安な 10 日間だった。更に、春学期は基本的にオンライン授業である上に複数人での会合も制限されていたため、同じ学科の院生や現地の学生との交流が難しく、孤独な日々を過ごした。このままでは帰国時に後悔するだろうと強い危機感を覚え、日本文化に興味を持つ学生が集まるサークルに入部した。結果的には、このサークルを通して韓国の方と交流する機会に恵まれ、語学交換の相手にも巡り合えたので、あの時勇気を出して本当に良かったと思っている。

また、幸いなことに後半からは大幅に規制が緩和され、授業も基本的に全て対面で行われるようになった。前半に辛い思いをした分を取り返すべく、後半は一層勉学に励むとともに、同じ授業を受講している修士学生・博士学生と積極的に交流し、一年を半年に凝縮したかのような充実した日々を過ごした。コロナ禍での留学は大変なことも多かったが、苦勞を通して得たものは何物にも代え難い宝物となった。

今後の社会貢献

延世大学校での学業を通して、今後の言語研究・言語教育の場では「ことばの深淵に流れる人間の本質を深く理解し、それらを広く教え伝える人」が求められるということ学んだ。「ことば」は単なるコミュニケーションの道具ではなく、話者の認知能力や文化的・歴史的価値観、社会通念といったものと密接に絡み合った産物であり、ことばを探究する上ではこれらの周辺的な事柄も考察対象となる。更に、第二言語による意思伝達の際にも、文章や発話の背景に存在する発信者の意図を正確に汲み取る能力が求められるため、ことばを額面通りに捉える表面的な語学力だけでは真の意味での理解には繋がらない。

また、留学中に幾度となく痛感したのは「多くの朝鮮語学習者は韓国文化の表層を掬うだけでその深淵にまで手を伸ばさない」ということだ。ネイティブのような発音で朝鮮語を流暢に話す学習者は日本国内にもごまんといるし、留学中にも高い語学能力を持った日本人留学生と接する機会があった。ただ、全体的に見ると「若者向けの韓流コンテンツ」以外の事柄に対しては非常に疎い印象を受けた。もちろん、これらは外国人が韓国に興味を持つきっかけとなるという点では有益であり、言語教育の場でも積極的に活用していくべきである。しかし、一定水準を満たした学習者の場合、更に高度な分野(文学・哲学・歴史・社会問題等々)に目を向けて、韓国という国の真髄を理解する洞察力と視野の広さを身につけることが求められる。

以上の学びを踏まえ、留学で培った経験と知識を社会に還元していくには、どのような形であれ「教育者」としての道を歩むことが最適ではないかと考えている。今後は将来的に教える立場に立つという自覚を持ち、研究面でも精神面でも一層鍛錬を重ねていく所存である。



図 1 延世大学校構内にある尹東柱の詩碑。

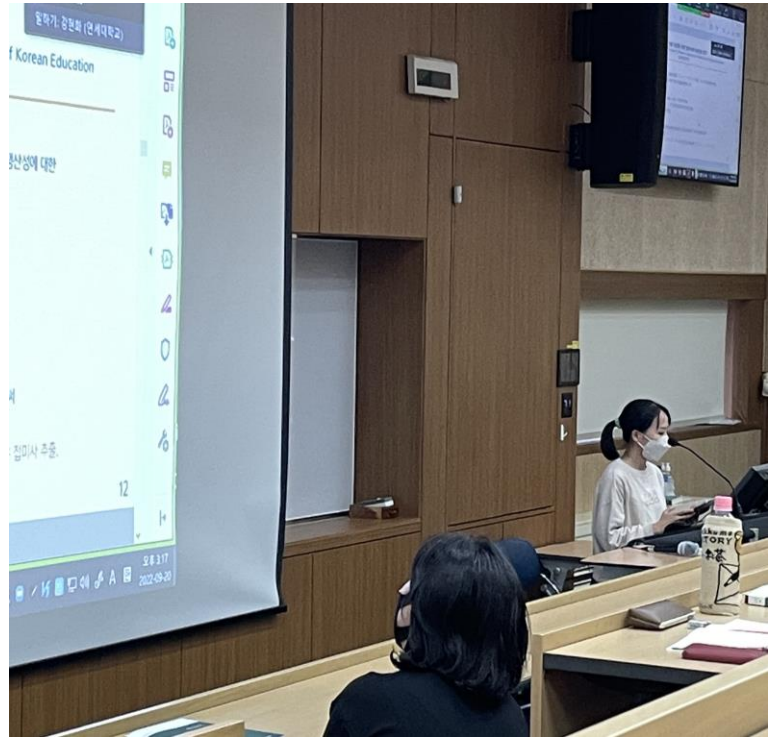


図 2 二学期大学院授業での発表風景(チーム発表)。



図 3 帰国前に言語交換の相手と江原道に旅行した時の一枚。